
The world which is in a state of flux(仮題)

樋口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The world which is in a state
of flux (仮題)

【Nコード】

N5513Z

【作者名】

樋口

【あらすじ】

人のように考え、人のように動き、自律成長プロトコル アル
ゴリズムによる精神の成長を可能とする人工知能の実現すら叶う時代。

二十二歳という若さで名だたる著名画家の仲間入りを果たした詩歌の元に、ある日身に覚えのない荷物が届く。

送り主の分からない怪しげな荷物を訝りつつも、閉塞した気分が紛れるならと一時の酔狂に身を委ね、開封して調べてみることに決め

る。

果たして、中に入っていたのは用途の不明な機器と、一枚の紙片であつた。

これだけでは掴めない。

詩歌は機器の特徴ある形状と紙片に書かれた文字を頼りに、次世代のマルチメディアプレイヤーとして普及している『CCE』で検索を試みる。

若干長めの接続時間のあと、表示されたのは膨大な数の検索結果。

その中で一際目を引く“『公式情報サービス』”というページを覗き、概要説明文にあつた『新しい世界』というフリーズに惹かれた詩歌は、数多ある他のホームページに目を通してから規定の手順に従い、電子世界と呼ばれる未知の領域へ飛び込む。

ただひとつ、自身の性別を男性と偽って。

第一章“幸せの絵画” 一話（前書き）

はじめまして、作者の樋口と申します。

この作品は一見SF風味ですが、ファンタジー作品として読んでいただけたらと考えています。

さて、ここの作品機能を使ってプロットや構想、詳細な設定を書き留めているのですが、どうにも編集に不慣れで構想の一部が公開設定になってしまっています。

度々やってしまうかもしれない、と書いた矢先から一話を丸々消してしまいました。

バックアップを取っておくべきでしたね……小説置換、恐るべし。書き直しているあいだ、二話だけの掲載になってしまいご迷惑をおかけしました。

拙作をお楽しみ頂けると幸いです。

第一章“幸せの絵画”一話

「ねえ、いるんでしょう？」

玄関の向こうから聞き慣れた声が届く。

その声を努めて聞き流しながら、詩歌は戸を隔てた玄関の床で毛布にくるまり、胎児のように丸くなっていた。

「ちょっと！　ここ開けなさいよ！」

やけに通る怒声と共に戸を叩く音が飛び込んできて、室外の喧騒に詩歌は思わず「うるさい」と口にしてしまう。

少し前から会っても生返事しかせず、最近になって会おうとすらしなくなっていたからか、彼女の反応は顕著だった。

一際大きく詩歌の名を呼ぶと、太鼓を思わせる速さでひっきりなしに戸を叩き始める。

しかし、それも長くは続かなかった。

詩歌の貫徹した無視に、もう反応を返すつもりがないと悟ったのか、やがて場は静まり返る。

怖いくらいの静寂が満ちる中、詩歌は後ろめたい思いで嵐が過ぎ去るのを待っていた。

怖かった。

彼女が善意から来てくれているのだと知っていても、気心の知れた友人である彼女が相手だとしても、詩歌は誰かと向き合つのを恐れていた。

「何で会ってもくれないのよ……」

嘆くような、悲しむような呟きを聞いた時、玄関の向こうで苦虫を噛み潰すようにしている彼女が目に見えようだった。

そんな呟きだけを残して彼女は去っていく。石畳に立つ硬質な足音が早く遠ざかるように祈りながら、詩歌は一言「ごめんね……」と漏らした。

足音が完全に聞こえなくなると、詩歌はくるまっていた毛布から這い出し、玄関扉に付いた郵便受けから外の様子を窺う。

本当に誰もいなくなったか念を入れるためだ。

自分でも笑えるくらい神経質な行動に、嘲笑いが零れる。いなくなっただけだと思わせて油断を誘う。

彼女がそんな真似をするはずなんてないと分かっているのに。

詩歌は自らが住むマンションの一室を見渡す。

殺風景な部屋だ。高層建築の粋を凝らして建てられたこのマンションは広く、十人でも易々と暮らしていけそうなのに家具は必要最低限に留まっている。

古臭いブラウン管のテレビに、寝具とクローゼット、申し訳程度にソファがあるくらい。

詩歌はこのマンションが好きではなかった。

生きていくのに必要なくらい広い部屋も、庶人を寄せつけない格調高い外観も、息が詰まってしまうことになることはあれど、喜んだことはない。

倦怠感を打ち払うように頭を左右に振り、重い足取りで居間に向かって歩く。

このマンションは著名な画家として恥ずかしくない家に住むべきだと、父親に厳しく言いつけられ、母親にやんわりと強制された結果だった。

インテリアにまで口出しされないのは誰かを招く必要なんてなく、このマンションに住んでいるという体裁さえ保てれば十分だと判断されたからだろうか。

招かないのは人付き合いに支障を来すかもしれないが、そもそも誰かを招くつもりなんて毛頭ない自分に、譲歩してくれたのだと思う。

益体もないことを考えているうちに、居間の前まで辿り着いていた。

詩歌はこれまた高級そうな扉を開き、中に入っていく。

目指す先は片隅にある油絵用の画布だった。

脚立で支えられたキャンバスの前に立ち、被せてある布を乱暴に取り払う。

布が床に落ちる音を聞きながら、詩歌は晒されたキャンバスの画面に目を凝らす。そこには、完成した『作品』が描かれていた。

小さな頃から、絵を描くのが好きだった。

家族が笑い合って過ごす光景も、怯えたように距離を置く妹と仲睦まじく遊ぶ場面も、切望し手に入れられなかった幸せを、平面上になら幾らでも生み出せる。

それは仮初めと称すのも烏滸がましい虚構の幸せだったけれど、当時、孤独に潰されそうだった自分を絶望の淵から救い出してくれたのも確かだった。

だけど、今は……。

目の前にある『作品』を見つめ直す。

テーマは『悲劇』。

長い時間をかけて二人の間に横たわるしがらみを乗り越え、手を取り合うことができた兄弟に襲いかかった不幸。

兄は祖国を侵略せしめんとする異国の大軍の前に立ちはだかり、軍人として、兄として、また一人の人間として、愛する祖国と弟、幼い頃のように純粋な気持ちで弟と笑い合える未来をも守ろうとする。

死地に次ぐ死地を潜り抜け、遂には祖国を勝利に導き凱旋する兄であったが、兄の心変わりを知った王は自らの犯した所業が白日の下に晒されるのを恐れ、凱旋の騒ぎに乗じて兄を弓矢で射抜く。

王に忠誠を誓い、墓の下まで秘密を持っていくと心に決めていた兄は何本もの矢を胸に受け、嘆き悲しむ。

忠誠を疑われた不実と、何より失われた弟との未来に。

ざわめく民衆と、慌てて駆け寄ってくる弟に手を伸ばし、睫毛を濡らして悲哀に叫ぶ兄の姿を写實的に描いたのがこの絵だ。

そう、悲劇だった。

自分に『悲劇』や『惨劇』を描き出す才があると知ったのはいつだったろう。

作られた『幸福』を一枚、また一枚と描き、大きくなるにつれて、絵が嫌いになっていった。

幾ら『幸福』を描き出そうと現実には何ら影響を与えず、素っ気なくあしらわれ、優しいようで中身の籠っていない言葉をかけられ、くぐもった悲鳴を上げて後ずさられる。

虚実に過ぎないのだと思い知らされる。

それでも『幸福』を描くのはやめられなかった。見たことのない父の、母の、妹の心から笑った顔はどんな感じだろうかと思像を膨らます。

かつての自分はそれだけで幸せな気持ちになれて、何度も頬を緩ませた。

そんな子供時代からもう何年経っただろうか。

今は絵が好きなと同じくらい、絵が嫌いになっていた。

「わたしは何をしてるんだろう……」

シミ一つない真っ白な天井を見上げ独白して、しかしすぐに仕事だと気づく。

そう、絵を描かなければいけない。

明日には次の『悲劇』を描くための画材が届く。

益のない感傷に浸っている暇はないのだ。

そう自分に言い聞かせて、明日の『作業』に備えて準備を進めていく。

準備しているあいだ、先程口にした独り言が頭から離れることはなかった。

第一章“幸せの絵画”二話

画材が到着する日、詩歌は朝から憂鬱な気分でリビングに寝そべっていた。

ガラス張りの窓からどんよりと曇っている空が見えて、気持ちの沈みに拍車をかける。

今ばかりは嫌いなリビングも気にならない。

原因は一本の電話だった。

『近々、お前の伴侶となるに相応しい男を紹介する』

父からの言だ。

やたらと話が長かったけれど、簡潔にまとめるとこの一点に凝縮されるのだろう。

後は振る舞いについての叱咤と、言葉面をなぞる程度の激励。

この二つのやり取りは毎回と言っていいほどあり、半ばルーティン化されているので然程重要ではない。 てつきり、今回も決まり切った話をするものとはばかり思っていた。

……あと、いつもと違う言葉が交わされることにほんの少しの期待も。

電話が終わった今、詩歌の気分はどん底だった。

悪い意味で裏切られた期待。

紹介するだけ、とは言っても、父の中で婚約は既に決定事項なのだろう。

式の日取りも式場も、果てはウェディングドレスや参列者の選定すら始まっているのだと確信できた。

違うとすれば神前式かもしれないというくらい。

昔からそうだった。

父は恐ろしいまでに玄人主義を信奉する人で、選良という枠から外れることを酷く嫌う。

娘である自分をよかれと思う方へ牽引し、同時に父の社会的立場を揺らがせない保険ともする、徹底した合理精神の持ち主でもある。

進路に関することは父が取り決め、自分はそれに唯々諾々と従うだけでいい。

父は心の底からそう考えているのだ。

まだ小さかった頃から、父は必要以上の関心を自分に寄せなかった。

いつも念頭にあるのは、如何に下手な振る舞いをさせないかであつて、意思は二の次だった。

医者や弁護士、学者に議員、実業家など、政財界や法曹界、多様な分野において、辣腕の人間ばかりを生み出す織倉の血筋。

そこにあつて、自分は一人前と認められていないのだと、かつての詩歌は考えた。絵の世界でなければ、商社の役員にでもなつていただろう。

しかし描画の才があると知り、中でも『悲劇』や『惨劇』を表現する適性は類い稀であると気づいた時、詩歌は『幸福』を描くことをやめた。

ひたすらに『悲劇』や『惨劇』の絵を描き、才に磨きをかけ、その末に描いた絵で名誉ある賞を受賞した日、父から本邸に来るよと言われた。

狂喜した。

いつもなら電話の口頭で済ませるのに、今日は直接会つと言うのだ。

今にも踊り出しそうな心を必死で抑え、自然と弾む声で了承する。

これで父に認めてもらえる。

いつもは威圧的に映る本邸が、その日は快く迎えてくれているように見えた。そして、急ぎ本邸に向かった先で言い渡されたのは、転居を促す遠回しの命令と、立ち居振舞いに一層気を配るよう念を押す言葉。それだけだった。

肩を落として消沈する帰り道、考えたのは、もつとたくさんの結果を示さなければいけない。

そうすれば、いつかきつと認めてもらえる。

そう、自分に言い聞かせた。

それから今に至るまで精進を心がけ、幾つもの栄えある賞を獲って。

経歴にそれらが積み重なるのと同じ数だけ落胆した。

今や、国内外にその名を轟かせていると自負してもいいほどになった。

なつて、しまった。

床に華奢な身体を投げ出したまま、詩歌は自分の肩を抱く。

結局、自分はどこまでいっても、都合の良い人形でしかないのだろっか。

視界に入っているフローリングの若木色が滲む。

泣いているのだと気づいた。

一度でもいい。

父に、母と妹に、自分を見て欲しかった。

絵に描いたものじゃない、本当の笑顔で笑いかけて欲しかった。

そう思うのは、間違っていたのだろうか。

自分には過ぎた願いだったのだろうか。

……分らない。

詩歌は抱いている肩を更に抱き締めた。

強く、強く、肌に爪が食い込むまで。

このまま、好きでもない人と結婚して生きていく。

あるかどうか分からない希望にすがって、『悲劇』や『惨劇』を描き続けて。

限界だった。

度重なる落胆に疲弊して傷だらけの心が、精一杯気丈に振る舞っていた心が、砂の城を蹴飛ばしたように崩れていく。

痩せ我慢で塗り固めた心は、砂上の楼閣でしかなかった。

不意に、来客を知らせる甲高い電子音が鳴り響く。

失意に暮れていた詩歌は最初のうち、気づきもしなかった。

しかし繰り返し鳴らされると漸く気づく。

緩慢な動きで立ち上がり、よたよたと玄関に向かう。

一体何の悪戯だ、と思った。

予定していた画材の配達は恙無く行われた。

ただし、

やたらと嵩張る不審物も込みで。

「……何、これ」

画材の荷をほくのも忘れ、不審物に貼られた配達明細を記載しているラベルへ飛びついた。

宛名、おりぐらしいか織倉詩歌。

住所、ここ。

宛名は間違っていない。

差出人、内容物、不明。 警告、天地無用。

これで明細とは片腹痛い。

詩歌は至極真つ当な感想を抱いた。

「……とりあえずどうしよう」

字面にすると狼狽えているようでいて、実際、あまり動じていなかった。

開けずに警察へ届け出るのが賢明だと分かっているからだ。

何事かで恨みを買って危険物が送られたのかもしれないし、こんな愉快な悪戯で楽しませてくれる知人は残念ながら思い当たらない。

とは言え、今すぐにどうこうしないといけないものではない、と詩歌は判断した。

今の時代、宅配物について宅配業者の監査はとんでもなく厳しい。

そのため、爆発物だろうが何だろうが中を開けずとも見抜いてしまうのだ。

加えて立場上、専属の警備業者とも契約を交わし、配達されるものに異状がないか二重の監査が入ったのち、警備員によって届け

られるのでまず危険を回避できる。

理想としては、不審物を自分の手元まで届かせないで欲しい。
が、詩歌には便宜上、差出人不明の荷物を定期的に受け取らなくてはならない事情があった。

単身、実家から離れたところで暮らしている、妹の身の回りを調査した書類だ。

この荷物を受け取った時 いや、今もずっと、誰かと話すのが億劫だったので、ろくに確認もせず、予期しない差出人不明の荷物を受け取ってしまった。

…… まあいい。

詩歌は不審物を放置し、丁重に包装された画材の箱を開く。

中身に過不足はないようだ。

早速取り出して作業に取りかかる、ことはしない。

全くと言っていいほど、描こうとする気が起こらなかった。

ここ数年、何かに追い立てられるように絵を描かなければいけないと感じていたのに。

あの不審物を開けてしまおうか。

気づけば、そんなことを考えていた。

迂闊なことこの上ないが、何かで気を紛らわしたかった。

もしかすると、自分の人生に幕を引く勇気は持てないから、不慮の事故を期待しているのかもしれない。

思考を巡らせば巡らすほどに気持ちが悪く。

開けてしまおう。

暗澹と渦巻く感情に誘われるまま、詩歌は不審物のビニールテープを外していく。

大きな箱だ。

高さは百六十センチほどある詩歌の膝上まであり、幅も肩幅よ

り広い。

外開きの上蓋に手をかける。

中に入っていたのは、奇怪なオブジェを連想させる機器類と、一枚の紙切れだった。

お馴染みのぶちつと潰す緩衝材に梱包されている機器類は一先ず放っておき、紙切れを手に取る。

『エーリユシオンモジュール・R 起動プロセス』

A4サイズとおぼしき用紙の頭には印字体でそう書かれていた。そこで改行されており、次の行からは起動手順らしい。

起動手順の部分を斜め読みして脇に置いておく。

次に、機器から梱包する緩衝材を取り外す。

見ればみるほど、不気味な形状だ。

記憶の片隅に引つ掛かるものを感じるのだが、何かは分からない。

得体の知れない機械をあれこれ弄るのも憚られ、ならどうしたものかと思案を巡らす。

CCIで調べるのはどうだろうか。

ふと、レギンスのポケットにある膨らみへ目がいく。

手をつ突っ込んで取り出すと、二十一世紀序盤で人気を博したと言われる、スマートフォンほどの小さな機体が出てきた。

CCI。

今急速に普及している、次世代のマルチメディアプレイヤーに付けられた総称だ。

正式名称は英訳で『The Computer has a function is Carry out in a operation infinitely』。

日本語に直すと『際限なく演算する機能を持つ電算機』の意を表す。

俗称のCCIは『Computer』『Carry』『Initially』の頭文字から取っている。

旧来のマルチメディアプレイヤーとは一線を画す性能は、携行できるタイプですらかつてのスーパーコンピュータに匹敵し、加えてある画期的な機能を持つ。

現代では携帯の電話機としての役割も果たしているそれを操作し、手際よく検索ワードを打ち込んでいく。

検索ワードは『エリクションモジュール』。

薄っぺらい餅のような形をしたCCIから、賞状額ほどの立体ウィンドウが浮かび上がり、虚空に投射された。

詩歌の顔に緊張が走る。CCIを握り締めた左手に手汗が滲むのを感じながら、固唾を飲む。

緊張からか、いつもと比べ少し長めに思える時間をかけて、立体ウィンドウが検索の結果を示す。

結果、ヒット数七十八件。

思いがけず、多くかかったものだとはくそ笑む。
だが懸念も浮かぶ。

この中に幾つ関連するものがあるだろうか。
見るからに疑わしいものは省き、一つずつ目を通していく。

「ない……」

困った、と重い息を吐き出す。

先程まであった淡い期待は微塵も残さず打ち砕かれていた。
他に目ぼしい単語がないか思索してみるが、思い浮かばない。

早々に手詰まりとなった調べもの。

暫しの逡巡を挟み 唐突に閃いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5513z/>

The world which is in a state of flux(仮題)

2011年12月20日17時54分発行